

童

2016年11月29日.

先日の思いがけない大雪で、大地の秋が劇的に終止符が打たれたようです。子供祭り お父さんデー 野菜や果物の収穫 紅葉 読書キャンペーンと秋 秋 秋・・・を満喫していた中、一夜明けたら冬景色。除雪機 除雪ドーザーまで登場して、もう年末か？と思わせるほどの景色が広がりました。自然のすごさを感じました。雪一つで、こちらの気持ちが、そして、見えるものが違ってきてしまいますから。

でも、子供たちは、さすが 現在を生きている！！ うれしい、楽しい、雪 雪 雪・・・ びしょびしょになって大騒ぎ 大喜び。大人は、凍結、タイヤ交換、冬の備えなどあたふたとこれからの危惧をする中、子供たちは、はしゃぎまわっています。現在に生きる子供たち、エネルギーがあふれています。翌日も冷え込み、雪が解けなかったので、「よかった！！ まだ、大地にはたっぷり雪がある！！」と歓声をあげていました。（大人は、まだ、雪は早すぎる と密かに思わずはいられませんでした・・・年をとった証拠か？） 雪の覆われたまだ未収穫のリンゴたちは、どう思っているのでしょうか。聞いてみたいものです。

スキー場のオープンも耳に入ってきて、志賀高原のナイターの明かりもちらほら見えてきました。いよいよ12月ですね。雪は早いのでしょうか。気持ちを冬モードに切り替え、雪遊び クロカン スキー スノーシュー 冬山登山などをイメージして、うきうきして冬を待つ これが若さの秘訣でしょう！！ 気分は いつも子どものままでいたいですね。



【327号室】

その部屋に入ると、窓辺に干し柿が吊るされ、漬物や保存食の匂いが溢れ、花や絵本も美しく並べられ、テーブルには、お鍋や食器や瀬戸物の器に、ヒジキやホウレンソウなどが入って並んでいます。その部屋は長野日赤病院327号室。病院特有の酸素や点滴の光景は、2日位しかありませんでした。

皆さんのお陰で、はっちは23日に無事退院することができました。本当にありがとうございました。

3年前の自分の自転車事故と同じように、何でもない場所で転んで転倒。決して、無茶した訳でなく、やはりちょっとした油断とウキウキ気分が、大事故に繋がったのでしょうか。場所が、ネパールの山奥だけに、その後の展開は、話を聞けば聞くほど、凄いいものでした。

骨が折れて、全く歩けなくなった時、リンゴ畑から誰かが来て、ジープでがたがた道を運んでくれ、田舎の名ばかりの病院へ。レントゲンは壊れていて、まあ捻挫ぐらいかなと言われて心配になり、小型飛行機でちょっと大きな病院へ。これは重大でおかしいので、ヘリコプターで、首都の病院へ搬送。ここでレントゲンを撮り、骨折と判明。絶対動かしはいけない状態。手術が必要で、日本へ帰っての治療を希望すると、ストレッチャー付きの飛行機でなければ許可できないという状況。それから、ハッチの看病 病院の医師との交渉、飛行会社との交渉、成田からの日本の病院との交渉とてんやわんやだったらしい。何度もネパールに行っているんで、現地に懇意にしているホテルオーナーがおり、雄飛の日頃からの活動の熱意を理解しているネパール人が、親身になりいろいろ交渉をしてくれたり。病院や飛行会社なども、雄飛たちの必死の熱意と頑張り、男気に動かされて、常識では考えられない対応をしてくださったらしい。

更に、雄飛たちが信頼している日本の友人（医師）に、現地から状況を相談して、どのように看病して対応したらいいか、自分たちでできる治療は何かと聞いて、細かいアドバイスをして下さった。しかも、日本の病院の受け入れ先、そこまでの搬送方法なども考慮してくださった。症状によっては、成田の病院、できれば、長野の病院と、候補が4つほど上がっており、寸前に、長野日赤となった。スムーズに運んだのも、医師としての友人の力だと感謝していたが、後日談として、実は違っていた。ネパールの病院の診断書や紹介で、そのまま空港から直行で（救急車ではないので）手術を必要とする大病院への受け入れは、難しいらしい。一旦、どこかの病院へ入り、その紹介状などで病院へ入るのが筋らしい。今回の状況は、事故から期日が立っており、すぐにでも入院する必要があるんで、すぐに直行したいとの交渉が必要だった。その友人は、医師としての人脈を使うのではなく、一般個人として、数か所の病院との交渉を下さったらしい。彼らのこれまでの努力や頑張り人生、思いを伝え、数か所断られた挙句、長野日赤が、その思いを理解して、動いてくれたらしい。その友人曰く、「雄飛君達や誰もが、今後できる道筋を作ってあげたい、特別な人やお金がある人ではなく、誰もが、思いを持ち、できる世の中、それを理解できる人たちが多く生まれてほしい そんな世の中であってほしい」だから、そうしたと。

成田迎えも、民間救急もしくは福祉車両でお願いしますということを、寸前に航空会社や病院から確認された。その時は、すでに、大地のハイエースの席を外し、リンゴ箱ベッドを作っていた。更に、直前に、機内持ち込み用の特別狭い特殊担架を用意してくれ（民間救急にはあるらしい）と電話が入った。今頃言われてもと思いつながら、これは、作るしかないと思いつち、壁板を外し、板を切り、作り上げて、成田へ出発。予想通り、飛行場の鉄格子の検問所で引っかかる。どこの会社の福祉車両ですか？ 会社名は？ と聞かれ、「大地です」「車に看板が入っていますよね」「ここにベッドと担架もあります」と堂々と答えた。どう見ても、自分の服装は、大地にいる時のままだったが。もちろん、青ちゃんのパスポート、免許、車検証、航空会社発行のIDカード等、全て調べられたが。時間がたち、奇跡的にOK通過。その時、係官がつぶやいた。「今までに、こんな福祉車両、見たことがないと」こちらも、どうしてもだめでも、最後は、思いだけで通してもらおうと覚悟していた!! 大地のバスは、見事にジャンボ機の真下に横付けされ、はっちと雄飛を無事、大地福祉車両の乗せることができた。車内で、ご飯を焚き、みそ汁を作り、納豆や豆腐などの食事を作りながら、日赤へ走った。日赤の救急車の着く入り口に、堂々と大地の福祉車両が無事横付けされ、ようやく安心した。

が、手術方法を巡って、人工関節か、ボルトでつなぎ、自然治癒力で年月をかけて治すか の問題が持ち上がった。本人は、自然治癒力にかけて、人工物を体に入れたくない、医師は、事故から日にちが立っているんで、治癒は難しいので、人工関節を進めるが、最後は、本人が決めてもらえばいいと。その後、はっちは、医師といろいろ話をして、その夜遅く、人工関節に決定した。ここでも、かなり2人の生き方に理解をしていただいたらしい。

手術後も、水分補給用の点滴は、自分で水を飲むからいいと、外してもらったり、薬は、できるだけいらぬとお願いしたり、究極は、食事は、全て、自分たちで作ると言って、病院食は断った。そして、それから、雄飛は、泊まり込みで、病院の脇を流れる犀川の河川敷にベースキャンプを作り、ここで、ごはんを炊いたり、料理をして、退院まで、完璧に食事を運び、手当やマッサージなど、すべて考えられること、できることをして、看護してきた。23日の午前11時 ハッチは、おじいちゃんのリンゴ売り場で、リンゴ収穫の選果作業をしていた。

大切なもの、ことを多くの人から青ちゃんは学んだ。手続きや物やお金などを懸念した自分、後悔や足りないことを懸念した自分が恥ずかしかった。彼らは、本当に純粹に、そして 恩送りで生きている。本当にありがとう。

ハッチ曰く「雄飛君には、特別早く介護してもらった。ちょっと早すぎるほどすべてを見せて、やってもらった」